PDF で提出してください

書式６

助成番号	２２－Ｇ１６

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

（MS Word）

【氏名】
武石 智典
【所属】（助成決定時）
筑波大学大学院人文社会科学研究科
【研究題目】
梁啓超の「武士」理解についての研究

【研究の目的】（４００字程度）

清末民国初の思想家、梁啓超が封建体制から立憲君主制へと変革を遂げた隣国の日本に関心を持ち、積極的に接受しようとした点については、これまでの研究で指摘されている通りである。中でも、江戸時代末期の思想家・教育家である吉田松陰に私淑していた事実は、よく知られている。実際に、松陰の『幽室文稿』に眉批を加えた『松陰文鈔』を著したことや、自身の変名に吉田という松陰の姓を用いたといった点からも分かる。しかしながら、梁啓超がどの程度、松陰並びにその思想を理解していたのかは検討の余地を残す。『松陰文鈔』の中で長州藩出身であるも、直接的なつながりを有さない桂太郎を弟子とし、記している箇所が見られる。また、武士という身分が存在しないにも関わらず、『中国之武士道』を著し、武士道という概念は日本固有のものではないとする。本研究では、梁啓超の松陰や武士理解、ならびにその背景を考察した。

【研究の内容・方法】（８００字程度）

梁啓超の武士理解という課題を考察するにあたり、①梁啓超の武士認識の形成過程、②武士をいかに理解したか、③武士解釈の思想的背景、これらの問題に留意した上で、文献学の方法を用い、梁啓超の著作と関連文献を中心に見ていく。

梁啓超自身が日本亡命中に松陰門下の品川弥二郎に宛てた手紙の中で、康有為の私塾万木草堂にて松陰の『幽室文稿』が読み習わされ、またこれに深い感銘を受けたと述べている。つまりは、梁啓超の武士理解において康有為の知見を継承したと言える。そのため、康有為はもとより、康が日本を知る上で参照した黄遵憲について確認する必要がある。そこで、これらの梁啓超の武士理解の形成過程に寄与した先人の認識を著作や先行研究を通して、いかに接受したのかを位置付ける。

梁啓超は『中国之武士道』の序文の中で、日本が明治維新を経て西洋列強に伍す国家へと発展した背景には、日本人自身も認めるように武士道精神があると述べる。そして、武士道という名称は日本固有であるも、その精神性というものは日本に限定されたものではなく中国にも存在したとし、武徳を有していた先人を挙げている。孔子から郭解までの人物選定から梁啓超の武士理解を見る。

『中国之武士道』をはじめとする武士について論及する梁啓超の論述の中で、日本の明治維新と関連付け理解していた。言うなれば、現在の清朝の政治状況を幕末に重ね合わせ、現状の打破を明治維新に中心的な役割を果たした武士階層、その精神たる武士道に求めようとするのであった。梁啓超がこうした考えに依拠して、武士や武士道を解釈したとするならば、その実像を理解するという点よりも、中国の政治状況の改革にいかに役立てるのかに重きを置くものであった。ゆえに、そこには梁啓超が想定する武士道と実際の概念の間には、明確な相違が認められる。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究では、梁啓超の武士理解について考察した。『中国之武士道』で、武士の精神と位置付ける武士道というものは、その名称こそ日本固有であるも、中国にもこうした概念は古代においては存在するとした。具体的には、春秋時代の孔子から漢代の郭解までの人物を挙げる。梁啓超が指す中国において武士道を体現した人物からも明確となるように、その武士、武士道理解とは、実像と距離があったと言わざるを得ない。なぜならば、

梁啓超が私淑した松陰に限らず、武士道全般の根幹にある忠義について全く留意していない点を挙げられる。このような認識の背景には、梁啓超自身が武士と武士道を、明治維新という体制の転換を認知する上での延長として把握したからこそと考える。つまり、梁啓超にとって重要なのは武士や武士道がいかなるものか正確に読み取るということよりも、こうした考えが中国の窮状を打破するのを目指すものであった。

梁啓超が武士や武士道に特段の関心を払ったことは先行研究で指摘されているが、本研究では、梁啓超自らがどの程度正確に理解しようとしたのか。そして、その思想的背景にまで論及した。

以上